

『イスラーム世界の社会秩序 もうひとつの「市場と公正」』の自己解題

一橋大学名誉教授 加藤博

関係性と社会秩序

現在、私は次のようなことをつらつらと考えています。

コロナのパンデミックは、改めて現代社会が予期せぬ異変や事件と隣り合わせであることを白日のもとにさらしました。そして、それは、社会の持続可能性にとって必要な国家、コミュニティ、個人の関係のあり方を考えさせる機会ともなりました。ここでコミュニティとは、国家のなかの地域社会のほか、宗教やネット社会のような国家を超えた共同体を意味することとします。



【講義風景から】

コロナのパンデミックのなかであきらかになったのは、非常時での社会管理における国家の役割の限界であり、コミュニティの合意形成と個人の自発的行為、とりわけ個人の自発的行為の重要性でした。世界は今後、ますます不確実性に満ちたものになって行くでしょう。コロナ後の時代、不確実性に対処し、持続可能な社会を維持するためには、個人、コミュニティ、国家のすべてが変わらなければなりません。

しかし、個人、コミュニティ、国家のそれぞれが独立して、日常的な惰性を打ち破ろうとしても、それは難しいでしょう。また、それを試みたとしても、不十分なものに留まるにちがいありません。個人、コミュニティ、国家のすべてが変わるためには、この三者が同時に変わらなければならないでしょうが、それは、個人、コミュニティ、国家の三者が新しい関係を持つことによって始めて可能になるのではないのでしょうか。

ここでのキーワード、それは関係性です。個人であれ組織・社会であれ、そのあり方は「他者」、つまり他の人や組織・社会との関係によって成り立っています。そのため、従来の人間・組織・社会での関係を変えることは、関係づけられている個人、組織、社会それぞれを変えることになるでしょう。こうした関係の束があって社会の秩序は保たれるのだと思います。

この社会における関係性の問題は、これまでの私のすべてのイスラーム社会研究を貫く基調をなしていました。イスラーム社会では、どのような関係の束を基本に秩序が維持されてきたのか、そして、それはほかの文化や文明の社会と比べて、どのような特徴を持っていたのだろうか、と言うわけです。そこで、以下、私がこの問題をどのように考えてきたかを、昨年出版した拙著の内容に引き付けて、述べてみようと思います。

なお、ここでいうイスラーム社会とは、19世紀以前のイスラーム世界での社会を、イスラーム経済とは、そのイスラーム社会で展開した経済を意味することとします。もちろん、19世紀以降の近現代についても、イスラーム社会やイスラーム経済を論じることはできるでしょう。しかし、私の考えでは、イスラームが体制であった時代と「民族」を単位とした国民国

家の時代では、人びとの生活環境が全く異なっており、近代を境に、その前後で時代を分けて、議論をすべきだと思っています。

iCardbook スタイルでの出版

さて、昨年出版した拙著とは、加藤博『イスラーム世界の社会秩序 もうひとつの「市場と公正」』 3 Vols, (iCardbook) Kindle 版, 詩想舎, 2020 です。ここで、この著作を取り上げるのは、内容はもちろんですが、iCardbook という出版スタイルを知ってもらいたいためです。iCardbook のスタイルとは、「200 文字程度の本文と参考文献を記述した」知識カード（下記の写真を見てください）を 100 枚程度束ね、編集した、新しい書き物スタイルです。

この著作の出版の企画は、詩想舎を主宰する神宮司信也氏から持ち込まれたものでした。2 年近く前でしたか、氏から、ある講演会での私のイスラーム経済に関する話をもとに、本を iCardbook スタイルで出版しないか、との提案があったのです。当時、私は、イスラーム社会についてこれまで書き散らし、喋り散らしてきたものを整理しなければと思っていたため、この提案に乗りました。提案に乗った最大の理由は、iCardbook という出版スタイルの新奇さでした。

私は自他ともに認めるアナログ派の、IT 音痴です。しかし、社会のすべての領域におけるデジタル化は、抵抗しても詮無い時代の流れであるとあきらめています。若者がウェブで情報を検索する速さを目の当たりにするたびに、自分がガラパゴス諸島の住民だと思い知らされます。しかし、ガラパゴス諸島住民にも、意地がないわけではありません。

聞くところによると、今日の大学生の多くが、パソコンを使わず、情報の収集をスマホに頼っているらしい。学術書が売れないのも、もったもだと思えます。そこで、細切れの知識しか身に付けようとしない今日の風潮と、思想を伝えようとする学術書の購読との橋渡しを目的に企画した iCardbook という出版スタイルに、新しさを感じました。すでに教職から離れた私には、その機会は失われましたが、授業での教科書を想定して、本を書こうと思いました。

とは言え、正直なところ、私はこの企画を、こうしたたいそうな思いからではなく、出版スタイルとして面白いとの軽い気持ちで引き受けました。というのは、企画を聞いたとき、iCardbook とは、私が学生のときに読んでなるほどと感心した、文化人類学者の川喜田二郎氏が考案した発想法である KJ 法（『発想法』1967 年）の IT 版だと思ったからです。

KJ 法とは、収集した情報をカード化し、関連する内容のカードをグループ分けすることによって、アイデアや解決の糸口を探る発想法です。それはカードを使ってはいないものの、我々が研究生活のみならず、日常生活でも無意識に行っていることであり、身近な知的操作です。そこで、iCardbook の企画を聞いたとき、この企画は、身近で日常的な KJ 法の知的操作のプロセスを、IT 技術を使って可視化することを目的としたものだと思ったのです。

著作『イスラーム世界の社会秩序 もうひとつの「市場と公正」』

以上、どういう経緯から、私が iCardbook スタイルの本を出版するに至ったかを紹介しました。そこで、次は、本の内容の紹介です。本のタイトルは、『イスラーム世界の社会秩序 もうひとつの「市場と公正」』で、「理論編」「歴史編」「基本概念・基礎用語編」の三巻から構成されています。それぞれの巻の執筆趣旨は、以下（URL）において、本の出版元である詩想舎の神宮司信也氏が「物語風な作品紹介・説明」というタイトルで語ってくれています。理屈っぽい研究者の文章とは違う、平易な文章で書かれていますので、それを読んでみてください。

Vol.1 イスラーム経済社会の構造（理論編）

<https://society-zero.com/icard/013/index.html>

Vol.2 市場経済における「イスラームの道」（歴史編）

<https://society-zero.com/icard/014/index.html>

Vol.3 基本概念・基礎用語編

<https://society-zero.com/icard/015/index.html>

ところで、このタイトルも、本の出版スタイルと同じく、神宮司氏の提案にかかるものです。私はこれまで、自発的に研究をまとめようと思った本を除けば、原則、執筆依頼者が提案してきたタイトルに手を加えず、そのまま、ものを書いてきました。それがうまくいったかどうかはともかく、できるだけ執筆依頼の趣旨に答えたいと思ってきたからです。今回の本作成も同じです。

そこで、本の内容の解題も、本の出版スタイルの新奇性に見合う形で、従来とは異なるスタイルで話そうと思います。それは、本の内容を目次構成に沿って解説していくのではなく、本の内容が本のタイトルにどのように反映しているかを示すことです。

この本は、先に述べたようにカードの集積からなっており、執筆者、つまり私の考えは三巻のいたるところに短文のカードとしてちりばめられています。そのため、どのカードから読み始め、それをどのカードと結びつけ、どのような新たなアイデアや結論を導き出すかは、読者に任せられています。

しかし、そうはいつでも、本のタイトルは抽象的な単語からなっています。そのため、タイトルとして配列された抽象的な単語に命を吹き込むには、触媒が必要です。ここでは、この触媒として、各巻のそれぞれの冒頭に置かれた三つのエピグラム（短い文章）を取り上げましょう。これらもまた神宮司氏が用意してくれたものですが、経済学者シュンペーター（1883-1950）、中世イスラーム世界の法学者イブン・タイミーヤ（1263-1328）、哲学者ウィトゲンシュタイン（1889-1951）の短文です。

偶然ですが、このエピグラムの三人の作者は私が好きな思想家であり、引用された文章には、私が本のなかで伝えたいと思ったメッセージが含まれているように思いました。

もうひとつの市場経済の道

第一巻の冒頭のエピグラムは、経済学者シュンペーターの言葉です。

資本主義は、その経済的失敗のゆえに崩壊するのではない。反対に、経済的成功のゆえに没落する。それは資本主義文明の衰退というものなのである。(J.A. シュンペーター)

シュンペーターは、イノベーション（創造的破壊、技術革新）をキーワードに、なぜ経済は漸進的にではなく、ある時点で飛躍的に成長するのかという動的（歴史的）な経済の成長を分析した経済学者です。この言葉の意味するところは、人類の歴史において勝ち残った経済システムは市場経済（交換経済）であり、資本主義はその延長で形成された以上、資本主義には生き残るだけの理由がある。その資本主義を完全否定するならば、唯一勝ち残った市場経済をも否定することになる。それは、諺にあるように、「角を矯めて牛を殺す」ことである。

しかし、シュンペーターは資本主義の将来に悲観的であり、「衰退」は不可避であるという。そして、その理由は、資本主義が間違っているからではなく、従来の資本主義の論理を突き詰めていくと、必然的にそうならざるを得ないからだという。それでは、「衰退」が不可避なのはなぜなのか。それは、従来の資本主義体制では、自らが生み出す深刻な危機に対処することができないからである。つまり、問題なのは、資本主義を成り立たせている市場経済ではなく、「従来の」資本主義を支えてきた社会経済の制度であり環境である。この社会経済の制度と環境をシュンペーターは「文明」と呼び、その限界から、資本主義「文明」は衰退すると予言したわけです。以下、このシュンペーターに倣い、市場経済を支える社会経済の制度と環境を「文明」と呼びましょう。

本の副題は「もうひとつの「市場と公正」」ですが、私がこの副題にみられる「もうひとつの」という言葉を好ましいと思うのは、こうしたシュンペーターの資本主義の見方に共感するからです。つまり、「もうひとつの」という言葉によって、市場経済の発展が人類の生活向上に寄与したという歴史を踏まえたと、**「従来の」資本主義の発展径路とは異なる、「別の」市場経済の発展径路の可能性が示唆されていると思われたのです。**そして、それは、「従来の」資本主義とは異なる「文明」をもつ市場経済でしょうが、イスラーム経済はこの「もうひとつの」市場経済の道を指示しているのではないかと考えているのです。

少し、敷衍してみましよう。イスラーム経済は、その本来の交換経済という意味において、市場経済でした。イスラーム経済は、人間の「欲望」を前提にして成り立っています。金を稼ぐことは、積極的に肯定されています。人間の「欲望」を前提にして経済体系が成立しているという点では、近代資本主義とイスラーム経済は同じです。

しかし、「欲望」を肯定する根拠が全く異なっています。近代資本主義での「欲望」は、人間の本性に基づいています。近代経済学の創始者とされるアダム・スミスは、それを交換性向、つまり「あるものを（自分の利益のために）他のものと取引し、交易し、交換する性向」と呼びました。

これに対してイスラーム経済の「欲望」は、至上の神（アッラー）の意志に根拠を持っています。人間は邪悪な欲望も持っている。しかし、それも人間を含む森羅万象の創造主である神が創ったものです。被造物である人間が良い欲望か悪い欲望かを判断することは、創造主である神の至上性を貶めることになります。地上のすべてにおいて、良いか悪いかの区別をつけるのは神のみだからです。したがって、すべての人間の欲望は肯定され、金銭に対する欲望も、その一つだということになります。

一見すると、この「欲望」に対する資本主義とイスラーム経済の根拠づけの違いは、些末なことのように見えます。結果的には、両者とも、人間の「欲望」を肯定しているのですから。しかし、この違いは、資本主義とイスラーム経済における世界観の根源的な違いに基づいています。

資本主義の世界観は、近代西欧の知の枠組みに基づいた、人間中心の世界観です。そこでは、世界は、神の聖なる世界と人間の俗なる世界の二つから成り立っています。経済、そして「欲望」は指摘するまでもなく、俗なる世界に含まれます。それゆえに、宗教と経済は水と油の関係にあり、「欲望」は人間の本性として説明されざるをえません。

これに対して、イスラーム経済の世界観は、イスラームの知の枠組みに基づいた、神中心の世界観です。そこでは、神の聖なる世界と人間の俗なる世界を分けること自体が、神への冒瀆として否定されます。そのゆえに、宗教と経済は渾然一体とした不即不離の関係にあり、「欲望」は神の意志として説明されることになります。

そして、この違いは、次に指摘するように、資本主義とイスラーム経済を取り囲む「文明」において、決定的な違いをもたらしました。

イスラーム経済における市場と公正

第二巻の冒頭のエピグラムは、中世のイスラーム思想家イブン・タイミーヤの言葉です。

人はその本性上社会的なものであって、その幸福達成のためには社会を形成し助け合わなければならない。（イブン・タイミーヤ）

イブン・タイミーヤは、厳格なコーラン解釈で知られ、現代のイスラーム思想に多大な影響力をもつ、中世イスラーム世界の法学者です。この言葉は、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの『政治学』で冒頭に現れる「人はその本性上ポリス（都市国家）的なもの」という言葉を踏まえたものです。

西欧におけるすべての社会科学はこのアリストテレスの言葉を原点としますが、イスラーム文明は、そこに見られる「ポリス（都市国家）的なもの」という言葉を「社会的なもの」と置き換えて、言葉の意味するところを一般化、普遍化したのです。イスラーム思想家たちは、社会を論じるに際して、必ずと言ってよいほど、この言葉から出発します。イスラーム文明

は古典ギリシア文化を継承したのみならず、それを発展させたということは、文明史研究において常識となっています。

さて、先に、市場経済の根幹にある人間の「欲望」について、資本主義とイスラーム経済は、それを肯定することは同じであるが、肯定する根拠がまったく異なっていること、そして、この違いをもたらしたのは資本主義とイスラーム経済における世界観の違いであること、を指摘しました。この違いを一言で述べれば、資本主義は人間中心の、イスラーム経済は神中心の世界観だということでした。

世界観の違い自体が、重要だというわけではあるません。実際、資本主義とイスラーム経済はともに人間の欲望を肯定し、市場経済を発展させました。重要なのは、その違いが市場経済を取り囲む「文明」の違いを生み出し、市場経済の異なる「道」へと導いた、ということなのです。つまり、市場経済のメカニズムは同じでも、「文明」の違いによって、市場を運営する仕方の違いがもたらされたのです。そして、市場経済の「イスラームの道」を示すのが、イスラーム社会のありうべき姿を指摘したイブン・タイミーヤのエピグラムです。

経済人類学者のカール・ポランニーは、本来、市場経済は社会生活の一部として営まれていたものが、近代になってその機能が肥大化し、社会生活で独自の領域を形成するなかで、経済と社会との関係が逆転し、経済が社会を支配するようになったと論じました。ポランニーは、社会生活の一部として営まれている経済を「社会に埋め込まれた経済」と呼び、それが市場経済の肥大化で失われていくことを歴史の流れと認めながら、その喪失を嘆き、復活の必要を主張しました。

この「社会に埋め込まれた経済」というポランニーの言葉にあやかれば、イブン・タイミーヤのエピグラムで示されているのは、「宗教に埋め込まれた経済」を特徴とする社会です。つまり、イスラームの世界観では、宗教と経済は不即不離の関係にあります。エピグラムにある「その（人の）幸福達成のためには社会を形成し助け合わなければならない」という文言は、人の「欲望」も、「社会を形成し助け合う」ことによって始めて達成される、と読むことができます。

つまり、資本主義経済のように、その発展によって、経済が社会から分離していったのとは違い、イスラーム経済の場合、経済の肥大化は避けられないとしても、経済が社会から分離しないように、歯止めがかけられているのです。

そして、そのうえで問題となるのが、「社会を形成し助け合う」ことによって始めて達成されるとされる「幸福」とは何かということです。ここで「幸福」という意味で使われているアラビア語は、通常は「社会福祉」・「公共福祉」と訳され、広義には、「公正」と訳すことができるマスラハという言葉です。通常、アラビア語で「公正」と訳される言葉としてはアドルやアダーラ（アドルが存在する状態）がありますが、これらが、神の正義と結びつけられて言及されることが多いのに対して、マスラハは、神の意図を体現しつつも、一般住民の日常生活に根づく社会慣行を反映し、社会や人間関係における福利増進や和解安寧に関連して

共有される「公正」を意味します。

このように、「宗教に埋め込まれたイスラーム経済」の内実を示すのが「公正」という言葉ですが、そもそも「公正」の意味内容を定義するのは難しい。それが使われる文脈によって意味を変えるからです。そこで、ここでは、「公正」を社会の構成員によって共有された合意事項やルールと考えましょう。

それは、社会を構成する人や集団がそれぞれ異なる意味を付与して意識しているとしても、おおむね、皆がそれを不公正なものとは考えず、それを共有することによって、日常生活が営まれている、いわばコモンセンスのようなものです。多様な人や集団が共生している社会で、秩序がもたらされるのは、法に代表される規範以上に、こうした無意識に共有されたコモンセンスによるところが多いと思います。

そして、イスラーム社会では、このコモンセンスをもたらす核心にイスラームの世界観を背景とした「公正」観があり、経済は、このコモンセンスから大きく逸脱しないように、歯止めがかけられていた。そこで、次なる問題は、イスラーム社会において、どのように「公正」観が醸成され、形成されたかです。

関係性のなかのイスラーム経済

第三巻の冒頭のエピグラムは、哲学者ウィトゲンシュタインの言葉です。

わたしの書くどの文章も、意味するところは、いつもつねに全体である。ということは、同じことをくりかえし言っているということになる。ひとつの対象をさまざまな角度から眺めたようなもの、にすぎない。(ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインは、言語と認識行為の関係を分析した哲学者です。この言葉で意味されているのは、すべての部分の一つの全体を構成していること、したがって、どの部分に注目するにしても、全体との関係でしかその意味は理解できない、ということです。少し、説明が必要かもしれません。

同じ言葉や行為についても、人は異なる見解をもち、互いを理解することは難しい、とは日常的に経験することです。それはなぜなのか。私が理解するウィトゲンシュタインの答えとは、人は同じ社会で生活していても、彼・彼女の社会との関係の持ち方が異なるからだ、と言うものです。

なんだ、そんなこと当たり前で、言われなくても分かっている、と思われるかもしれませんが。しかし、ここで重要なのは、禅問答のようですが、人(部分)が集まったからと言って社会(全体)ができるわけではない、と言うことです。人(部分)と社会(全体)は切り離せない。両者が「入れ子」のように深く関係しあっているからです。

したがって、両者の関係の仕方—難しい言葉を使えば、「関係性」—が変われば、人と社会は

同時に変わる。人が社会を変えるように見えるときでも、それは人が社会そのものを変えるからではなく、人と社会との関係のあり方を変えるからである。また、革命のように、一見すると社会の変化が人を変えるように見えるときでも、変わるのは人そのものではなく、人の社会との関係のあり方である、ということです。

本題のイスラームの「公正」という言葉に引きつけて言えば、私が関心を持つのは、個々のイスラーム教徒の「公正」観や教義としてのイスラームの「公正」観以上に、コモンセンスとしての「公正」観をキーワードに、イスラーム社会で、どういう人と社会の関係が、先に指摘した「宗教に埋め込まれた経済」を実現したかを知ることです。イスラーム社会には、イスラーム教徒のほか非イスラーム教徒が生活し、彼らもまたイスラーム経済を営んでいました。

つまり、ここで問題にしたいと思うのは、言葉や理念ではありません。言葉や理念がいかにか人を惑わせるかは、20世紀を生きた我々が身に染みて感じていることだと思います。何度、我々は言葉や理念に裏切られてきたことでしょうか。言葉や理念は、現実の社会の仕組みに反映されない限り、社会に継続的な影響を及ぼすことはできないし、できないのみならず、社会に混乱を引き起こしさえします。

イスラーム経済も、現実の社会の仕組みとして展開しない限り、机上でのモデルに留まります。私がイスラーム経済に注目するのも、イスラーム経済が歴史の現実のなかで、実際に、市場経済の発展の「もうひとつの」道として展開してきたからです。そして、そこに、括目すべき人と社会との関係をみてとれるのです。

このことを示すいくつかの事例を、拙著では挙げました。そのうち、もっとも多くのカードを作成したのは、ワクフというイスラームの寄進制度についてです。ワクフは本当に巧妙に設定され、運営された寄進制度です。その運営の仕方や社会経済生活で担ってきた役割は、時代によって変化してきました。しかし、その原則は、変化していません。

このようなワクフを、短い文章で解説するのは難しい。しかし、そこには、イスラーム経済における人と社会の関係が凝縮されて示されていますので、ワクフを具体的な事例とし、その簡単な解説を試みるなかで、これまでの議論を敷衍してみましよう。

まず、ワクフの名の由来です。ワクフとは、「停止すること」「凍結すること」を意味するアラビア語です。ワクフは寄進制度であり、寄進者が私財を慈善目的のために提供することによって成り立っています。ワクフ制度では、こうして提供された寄進財について、原則、その処分は永久に禁止、つまり「停止」・「凍結」(ワクフ)されるところことから、イスラームの寄進は、ワクフと呼ばれました。

ワクフは、イスラーム教徒に課された五つの宗教的義務(信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼)の一つである喜捨(ザカート)に基づいています。この信徒の宗教的精神による自発的行為を拠り所としているという点では、ワクフも他の宗教の寄進と変わりありません。

しかし、ワクフには、他の宗教の寄進とは決定的に違う点があります。それは、他の宗教の寄進では、寄進者は寄進後、寄進財との直接的な関係を断たれることとなりますが、ワクフの場合、寄進者は私財を寄進する際に、寄進財を自らが指定する管理人に委ね、寄進の目的や対象など寄進財の運用に関して、こと細かな取り決めを文書の形で指示することができたのです。

このように、ワクフでは、寄進者による寄進財の運用に対する裁量が認められていました。したがって、当然のことながら、寄進財が公共目的ではなく、私的目的に使われるということにもなります。しかし、イスラーム法学者はこの点について鷹揚でした。寄進財の一部が、あるいは寄進財が最終的に公共目的に供されると文書で約束されている限り、寄進財の私的目的が含まれる寄進と、当初から寄進財のすべてが公共目的に供された寄進との間に区別を設けず、ともにイスラーム法に照らして有効な寄進と認めました。

なぜ、このような、生真面目な日本人には理解しがたい、融通無碍な解釈がなされたのでしょうか。その理由を突き詰めて行くと、先に指摘した、この世の森羅万象の存在を神の意志に基づかせるイスラームの世界観に行き着きます。この世界観では、人は神との一対一の直接的な契約を結ぶことで存在を許されるのであり、キリスト教の教会、仏教の寺院のような、人と神とを仲介する組織はありません。日本ではしばしば、モスクのことをイスラーム寺院と訳されることがありますが、それは間違っており、モスクは礼拝が行われる場所ではありません。

つまり、イスラームは原則、中央集権的な宗教の権威を持たず、すべてが個人の意思から出発し、社会は人と人との関係から成り立っているのです。イスラームでは金儲けの欲望が肯定されているのも、この世界観に基づくのだとは、すでに指摘した通りです。ワクフの場合も、人間の欲望を肯定する限り、理想からの逸脱は避けえないと、イスラームは実利的にものを考えるのです。

実利的にものを考えると、言い換えれば、人の行為の良し悪しを、行為の動機によってではなく、その結果によって判断するということです。私は、現代の日本人にとって必要なのは、こうした広い幅を持つ解釈の上に立った実利的な思考ではないか、と思っています。

話をワクフについて戻しますと、こうした実利的な寄進財の運用がもたらす効果、それは、個人の寄進に対するインセンティブ（動機づけ、誘因）が高められ、その結果、イスラーム社会においてワクフの広範な普及がもたらされたということです。

ワクフによって寄進されるのは、ほとんどが土地や建物です。それは、寄進によって公共目的に供された資金が、賃貸借など、寄進財についての資産運用からあがる収益であったからです。つまり、ワクフは交換経済なしには存在し得ず、個人の欲望を基礎とした市場での資産運用を前提にしているのです。

前近代のイスラーム世界では、ワクフは広まり、都市のインフラのほとんどはワクフによって建設され、維持されました。つまり、ワクフは個人の宗教的な行為を超えて、社会を維持する社会経済システムになっていくということです。というのも、ワクフでは、私的な欲望に基づく寄進財の資産運用の結果として、公的な所得の再分配と社会資本の形成が実現されたからです。つまり、ワクフは、目に見える形ではないものの、社会にビルトインされた（埋め込まれた）所得の再分配と社会資本の形成のためのチャンネルとして機能したのです。ワクフの普及と市場経済の発展は、歩を共にしていました。

以上から、なぜ私が、イスラーム経済は市場経済でありながら「社会に埋め込まれた経済」として展開したと評価し、拙著のタイトルにあるように、イスラーム経済を近代資本主義とは異なる、市場経済の「もうひとつの」道だと考えるようになったかの理由を、少しはご理解いただけたでしょうか。

ところで、私は、このエッセイの冒頭で、コロナ後の世界において持続可能な社会を維持するためには、個人、コミュニティ、国家のすべてが変わらなければならないであろうこと、そして、そのためには、個人、コミュニティ、国家の三者が新しい関係を持つことが必要であろうことを指摘しました。その上で、新しい関係を考える際に、「イスラーム世界の社会秩序」は参考になるであろうと、その概要を紹介してきました。

ここでは、個人とコミュニティ、つまり社会との関係に焦点を当てて話を進めたため、個人、コミュニティ、国家のうち、国家については言及しませんでした。そこで、最後に一言、イスラーム社会における、個人、コミュニティと国家との関係についての私の考えを簡単に述べておきましょう。

イスラーム世界でも、それを国家と呼べるかどうかは別にして、政治権力は社会にとって重要で、それなしには、社会秩序を維持することはできませんでした。しかし、それは、国家が人や社会を管理するという意味においてではなく、人が平穩に日常的生活の営みを行う場としての社会を保証するという意味においてです。

実際、イスラーム世界の政治権力のほとんどは、異民族征服王朝でした。したがって、彼らが統治を有効になそうと思うならば、統治する人や社会によって支配の正当性が認められなければなりません。そして、彼らが統治しようとしたのは、ほかならぬイスラーム社会でした。つまり、イスラーム世界の政治権力は、みずからをイスラームの保護者だと主張しない限り、継続的に人と社会を統治することはできなかったということです。

イスラーム経済との関係でいえば、イスラームでは、国家が経済に、恣意的に介入することを良しとしませんでした。また、イスラームの寄進制度であるワクフについても、それがイスラーム法の管轄事項であったところから、非常時ならともかく、日常時にはワクフの設定や運営に介入できませんでした。そもそも、政治権力者が、みずからの統治の正当性を示すためにも、進んで私財を寄進（ワクフ）しました。この意味において、イスラーム政治は、イスラーム経済がそうであったように、「社会に埋め込まれて」展開していたのです。

